夜の花ざかりまたは 小説

J・ミネカイヅカ

刊 行 社

夜の花ざかりまたは小説

J・ミネカイヅカ

刊行社

J・ミネカイヅカ

本名、田中耕三。

一九三四年、東京生まれ。

暁星中学及び高校にてフランス語を学ぶ。慶応義塾大学哲学科卒業。在学中に米国コロンビア大学へ留学する。NHK国際放送勤務を経て渡仏。一九七〇年パリのロベール・ラフォン社より Jean Minékaizuka の筆名にて La neige était fondante を、また翌年同著作の日本語版『雪は湿っていた』を新潮社より出版する。一九八四年『J・ミネカイヅカ短篇作品（セシリア尼と海と…／電話猿幻想）』、改訂版『雪は湿っていた』、新作『諒解』を本作品と同時に刊行社より世に問う。著者はカトリック信者。

現住所、東京都大田区田園調布三―十五―七

附記

本作品は一九七六年に非商業ベースにて限定出版し後に改訂加筆したもの。

夜の花ざかりまたは小説 ©

昭和五十九年八月十日印刷
昭和五十九年八月十五日発行

定価 一、五〇〇円

著者 J・ミネカイヅカ

発行者 高木行一

印刷 製本 凸版印刷株式会社

発行 株式会社刊行社

東京都新宿区下宮比町一五 二二二一
電話 〇三（二六七）六九二五（代）
振替 東京 三五八一二五

ISBN4-906153-04-6

夜の花ざかり

または

小説

《あなたが書く筈であった小説の代りに》

義兄(あに)上様へ

私はひとりで生きて独りで死ぬ薔薇になりましょう。

夢や追憶や慣れ親しんだ生活の色合いなどの気楽で心地よい陽だまりに安住したいとは思いません。人間は自分が幸福だと気づきさえすればすぐ幸福になれる。即座に。餓えで人が死のうとも、少女が辱しめられようとも……　やっぱり幸福でしょうか。

郷愁(ノスタルジー)が私に《小説》を書かせるのではありません。しかしこの四(カ)人組舞踊曲(ドリール)ふうな＊長調協奏曲「花ざかり」に《時間》を封じ込めて、ふたりに共通の一挿話――あなたにとっても私にとってもたびた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

び繰返されることの一つにすぎない――を驕りと放蕩の果ての夜の墓地のように暗く茫漠とした私たちの過去に仄かに浮きあがらせることに成功すればそれも一興でしょう。

こよなく絶妙な「完璧な瞬間」とは沸きたつ舞台の上でしかおめにかかれないものなのでしょうか。

他人(ひと)の言葉が《小説》の味つけとなり本文と競うソロの役割を果たすように……

一九七＊年　クリスマス

冴子

これは私に托された冴子という女の手記である。彼女の昔の恋人の一人とおぼしき男によって持込まれたすこし手垢のついたこの原稿は義兄上とよばれるひとに見せたいという意図で書かれたものであろうが、筆者の人生のある時期に実際起ったことを綴ったのか、それとも自分自身の慰めのために願望を描いたのか。登場人物の一人でありかつ語り手である彼女は――おそらく故意に従来のきまりを無視して――あるときにはあたかも三人称小説の筆者のようにすべてを知り尽す《神の位置》に佇ち、他人の心のなかや自分が居あわせるはずのない場面にも自由に大胆に踏みこんで物語の cubisme を実現している。これは小説の単なる試作にすぎなかったのだろうか。なお本文に鏤められた《花》は装飾音のつもりであろう。

編輯者

Allegro

ma non troppo

1

十年まえは若かった。十年まえは美しかった。十年まえならなんでもできた。私はこの十年をどうしてしまったのだろう。

J・アヌイ

（私の手帖から）

二月十日、冬の壁を割ってはじめての春風が吹き、寒暖計は十八度を指していた。「なかのみや鮨」では戸も窓も大きく開け放たれていた。輝くように晴れあがってどこにも春が溢（みなぎ）っており、五月かと思うほどであった。

土曜で勤めが休みだったので、朝寝をし独り遅い昼食（ひる）をこの閑散とした店で摂っていた。まるで時間がおき忘れられたように静寂（しずか）なくつろぎのひととき……　好天気にさそわれて飲むひさしぶりのお酒のせいか幸福感に浸っていた。（これが幸福？）《遁（に）げる月、二月には飢える》とだれかが言ってい

たようだが……　柔かくて新鮮な大とろの刺身、口蓋に冷たくまろやかなイクラ、海胆などをたべた。酒の味と舌の上で混りあいとろけるようだった。また鮑と生の肝を注文した。〈おくさんはなかなか通だね〉と親爺に褒められた。〈御婦人がたは一般に肝なんか食べやしないからね〉……もちろん鰺や小鰭、生きのいい赤貝もにぎってもらった。春とはいってもやはりまだ二月だ。店のなかにまで射しこんでくる透明で明るい、いくぶん虚ろな光に涵って夢中で食べた。〈貝類は春がうまいね〉とおやじは得意そうにいう。蝦蛄やにぎりの上でひくひく動く蝦のおどりもたのんだ。白い割烹着を羽織った主人はたくみに調子をとりながらすばやくにぎるので食べるほうが追いつかない。漆塗りの台の上に並んだ鮨は赤、青、紫、白などの貴重な石のように滑らかで瑞瑞しく光っている。新しい白木の一枚板を台につかった改築したてのこの店は高級な食べ物屋がない薄汚ない界隈では食慾を誘う数すくない店のひとつである。義兄の範男が懐が暖かいとき姉の芙美もいっしょにここへ連れてきてくれたことがあった。このほか行きつけのもっとやすい店も二、三ある。たとえば冬の夜行族――大蒜入りの生の海鼠、鮟鱇、男友だちに仕込まれたひれ酒などで真冬に私が軀をあたためるうす暗い河豚提灯のぶらさがった鍋物屋、天井を鳥の羽でおおった焼鳥屋など……　そこは精のつくという海亀の卵、蛙、馬肉、また季節には雉子の刺身、鴫や「野鶉」と称する密猟の鶫がおいしい。〈いや、網にかかる鳥のほうがわるいんですよ〉などとその店の主人はうまいことをいうが小鳥の肉から鉛の弾丸がでてきたことがある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

どうして今日にかぎって高くつく鮨屋に来たのか？　なにか幸福な予感で食慾を唆られたからか、それとも暖気のせい？（悪い虫のしらせなどはすこしもなかったのだろうか……）午後二時半に範男と逢うことになっていた。習慣的な悦びさえ感じはじめているこの週にいちどの待合せを思い巡らした。

〈……窓も入口もあけっぱなしです、寒くないからね〉と愛想のいいおやじがいったので私は現実に戻った。紺の麻のれんの向う側にまだところどころ灰色の風景が常緑樹の輝く緑に彩られてみえた。空気が軽やかで憩に満ちた店の暗い奥は人気がなく打水でしっとり濡れている。

もう若いとはいえないわが身だが――あと二か月と十日、すなわち七十日もすると三十三歳になる。二十七の誕生日には西洋人が crow's foot とか「鷲鳥の足」とかいういまわしい目尻の小皺にはじめて気がついたが。いつになっても魅力を感じる春の回帰にも思いきり季節感に呼応できないようで憂鬱だ。しかし突然はやばやと訪れた春、過去と関連の薄い無名の春、これはまた別ものだろうか。私は日ごろのコンプレックスを捨て去りなんの気おくれもなく、自分の年齢も惨めさも考えずに呼吸できるのだ。《春を感じるって若返ることね……》こう思うと晴ればれする。まだ春を愉しむ能力が自分にあると知るのはうれしい。ひとりでほほえんだ。独身なので相手なしでも娯しむ術が身についている……　範男がいつか話してくれたくだらない冗談を思い出した。一見好人物で道化た義兄は笑うたびに《細い眼が濡れたように潤んで》みえるのだが――彼は私の表現を「詩的」だといって御機嫌だった――この笑いに濡れた眼が曲者、けじめを超えた大胆さで光ることがある……　強靱な

女たらし、《わが愛は汎(あまね)く女性に惜しみない生きがいをあたえる神の愛(アガペー)》と自任してはいるがお手並を拝見したわけではない。彼の喇叭はともかく、淫蕩、美食……　また尖塔のように天を突刺す傲慢などは地上でもっとも麗しい罪ではあるまいか。

でき損ないの男の子――売れ残りに与えられる名。

（G・A・マソン、私の手帖から）

もちろん美人ではない。しかし声だけはよいと自分では思っている。アルコールで舌が滑らかになって気軽におやじに話しかける。例の好奇心で〈このお花どうしたの？　なんていう名まえ？〉〈さあ……〉〈桜草かな……〉ゼラニウムやサイネリア、さかりが過ぎて色の褪せたシクラメンもある。私は花のことは詳しくないが――。〈これは虎の斑、そっちのすこし栄養不良のは台湾の竹です。借りているんですがね、一日一鉢三十円で。買うよりずっと安くつくんです。うちじゃあ水をよくやるんで植木屋がよろこんでいいのを持ってきてくれます〉とおやじは屈託なく笑い、話しつづけた。私のほうはもう心が街に飛び、おやじのお喋りをぼんやり聞き流した……　ことし初めて外套を着ずに出かけた。朝から身体が軽く肢体がのびやかに感じられ、そよ風が燃える頬にここちよい。義兄(あに)もいつものように「青びょうたん」などとはいわないだろう。電話でＦ＊＊＊百貨店の婦人靴売場で落合

うことになっている。ふだんよりていねいに服にブラッシをかけてきた。というのも今日はなにかあらたまった気分で、自分をいっそう意識しているからか。一挙一動にも気を配り、いつもの衝動的な行動は慎しみ……　まるで映画のなかの女優のように生きてみる？　そうすれば、とりとめのない一日も「歴史」の重みをもつようになる？　たとえば《冴子女史が痩せすぎた体軀に栄養をつけるため鮨屋でひとり昼食を摂っていたちょうどそのときに、どこそこでしかじかの劇的な事件が起きた》というふうに考えてみようか。（……これは小説の書出しにもわるくない。）それだけで、とるに足らない些細な行動もうら打ちされて定着し、客観性を獲得して瞬間が永遠の価値をもつようになる？　まさか……

昼食をすませお茶を飲み莨に火をつけながら前日から読みかけの小説を開いてみる。良心的な革命家だった労働組合の女闘士が恋人をもってからただの女塊になりさがり、情熱を燃やしつくした挫折感の果てに「老後」を送ることになる筋だ。（この小説のモデルは現在三人の子持ちの平凡な主婦だという噂をきいた。）主題はおもしろいが、緊張感も劇的なもりあがりもない――「結晶」しないたいくつな作品。小説の「まことらしさ」と劇的な時間の観念とは私たち日本人の頭のなかでどうしても折合わない、となにかで読んだのはこのことか。「まことらしさ」は単調で羅列的な時間の経過だけが醸し出すもののようにひとは思い、ある事件が現実性を保つためには永遠に反復する日常的な時間の内へもどされる必要があると考えている、こんな確信が「写実主義的偏見」であるという主旨だった……

終りまでめくって本を閉じた。私は新刊書などをかたはしから読破するほうであったが、はりがないのか年ごとに怠け者になっていくようだ。

私だって熱情家だったことがある。情熱の対象は革命とは限らない。学問、芸術、恋愛……　神に奉仕するひとびともいる。むしろ、自らを神格化するのがいまの私の大それた情熱？　（女が蛇に唆されて「神の如くなれる」木の実を食べたため人類は楽園を逐われたというが。）つまりそれは何らかの形で時間に細工をほどこし生の流れを制御し堰止め、結晶した「完璧な瞬間」を経験すること？　（時間の包装をつくることか。）この地上で人間の生命をもちながら永遠に息づくこと？　この恍惚感を味わうために人は自ら命を断たねばならないのだろうか。

わたしは痍にして刃！

平手打ちにして、頬！

自己破壊による完全な自己把握……　孤独な試み――《私は存在すると各瞬間自分に言いきかせられるなら、あらゆる苦痛を征服できそうな気がする》……畏れをしらぬ傲慢！　蹂躙！　濫費！（*lipus*＝贅沢、横柄、放蕩、暴行、冒瀆、無礼、侮辱、酷使、勝手放題。反意語は*mons*＝信頼、信念、確信、貞節、誠実、正直、信用、安全、保証、正当な理由、誓約、証明、証拠等等……　**編輯者**）いま私は神のように充足りている。美食、休息、春のけはいなど人生の些細な悦びが神秘的な幸福感への手びきとなる。

ホッテントットの伝説に若者がある日垣間見た美しい白い鳥が忘れられず、家庭も仕事も擲って一

生漂らい歩き、ついに白い羽毛を一本握りしめたまま息絶えたという話がある。人は幻の品物、理想の品物をたえず想い描いて探し求め追い続けるものではなかろうか。情熱に貴賤があり高尚な目的をもつものだけが貴重であると思いがちであるが、私はむしろ情熱の行為そのものに価値を置く。寄宿生時代ある上級生に熱をあげ、およそ二年間は彼女のために生きたようなものだ。少女期独特の無分別であった。エリザベス女王の時世に殉教したイエズス会の高僧エドモンド・カムピオンの伝記小説を邦訳する仕事を手伝って、厖大な単語を英英辞典でひき精魂こめて原稿を写しもした。今ではあまりよく覚えていないが、おそらくヘンリー二世時代のサー・トマス・ベケットの世俗の権力と精神生活という二つの相反する情熱が相剋する劇的な生涯にも較べられるものであろうか。このほうはアヌイの「ベケット」やT・S・エリオットの「寺院の殺人」などすぐれた戯曲によってもっと世に知られているが。

それから三年間あの凡庸でとりえのない遣りがいのない男の生活を支え学資を貢ぐためとうとう好きな精神分析学の研究も拋げうって働いたっけ。学位を獲る夢もこれでうやむやになってしまった。そのうえ昨年一年のあいだに親しい男友だちが二人もあい次いで世を去ったとはずいぶん酷い偶然ではないか。辞書の編輯を手伝っていたころ出版社で知合った妻子のある男は私を求めていたが、突然電車に身を投げて自殺を遂げてしまった。私が母親代りをつとめた、独り住いであまったれの男はanorexia nervosa（神経性拒食症）という病気で栄養不良をきたし精神病院で自ら死を招いたと言われ

ているが、これも一種の自殺ではなかろうか。一人前の月並みな大人になりたくない年ごろの女の子にはよくある症状だそうだ。彼女たちは情緒不安定になり、いっそ水か空気のような存在になってしまえばいいと考えて急に食を細くし痩せようと努めはじめる。そのうちこの儚い反抗心からほんとうに食べられなくなってしまう。なるほど大人になるのを望みかつ引受けるのはむずかしいにちがいない……　彼らの自立性の欠如が私の母性本能に訴えたのか。

しかし私は生き延びている――。こうした不運を目のあたりに見てまだ人生を愉しめるとは……情熱は遁げていく。にもかかわらず人間らしい生甲斐のある永劫に繋がる瞬間を生きたという満足感は消え去らない。芸術家のように自分が生きたことの証を遺しえないものは客観的価値とは関係なく過ぎゆく現世のごくつまらない事物にも「憧憬」の対象を見いだし、たとえば木洩れ日に透きとおる葉の一枚一枚をも愛で、それに情熱を燃す。また過去のそのような時間をいつくしむ……　悲しい憶い出も今この瞬間に味わっている真昼の静謐と孤独な幸福を擾すことはできない。《……いかなる錬金術によってきのうの悲しみが今日の幸福感に変ったのか、しずかな日蔭の幸福に》とJ・グリーンの「日記」にあったっけ。……鮨屋を出て大股に歩きながら学校でならったブラウニングの詩を吟んでいた。

ときは春
……

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com